



大学改革に何が問われているか

林 勇二郎 Yujiro HAYASHI

(独)国立高等専門学校機構 特別顧問



大学改革の動きが活発である。グローバル人材の育成，教育の質的転換，センターオブイノベーション，国立大学改革プラン，ミッションの再定義など，話題も課題も山積である。グローバル化や情報化の進展により社会の構造が急激に変化している時代である。“社会のため”を自負する大学にとって改革は必然であろうが，それが国の成長戦略に絡むとなれば事は複雑である。

数年前，ワシントンポストの記者が国立高等専門学校機構を取材に訪れた。“来年11月はアメリカ大統領の選挙である。政権の節目に問われるのは高等教育政策であり，については高専を調査したい”が主旨であった。WEB版に高専特集が生まれ“日本の高専は産業界のニーズと学校教育のギャップの橋渡しに成功している”との論評をもって紹介された。以前に訪問したOECDの高等教育調査団もワシントンポストも，人材育成を国の最重要課題と考え，世界中の高等教育を常時調査している。それは長期にわたる国をあげた高等教育戦略である。

高等教育に対する今日の期待は，課題解決能力を持つ人材やグローバル人材の育成であり，社会が必要としている専門分野に対する職業人の養成である。我が国の高等教育機関は多様であり，実施される教育も多様である。その中心をなすのは，学問体系に基づく学部学科のもとでディシプリン型の教育を実施している大学であるが，それは必ずしも多様な分野の職業人をカバーするものではない。

5年一貫の本科と2年の専攻科からなる高専教育は，このような大学を中心に接続するリニアシステムとは別のトラックを歩み，科学と技術の知識を体系化したエンジニアリングサイエンスを，企業との協働教育をもって実質化してきた。既定の路線を外れ，現場を取り込んだ実践的で創造性の教育の評価は高いが，年間約1万人の学生を輩出する高専の存在は少数派でしかない。

大学等における研究は，真理の探究にかかる認識科学とそれを技術や実践につなげる設計科学よりなる。学問の体系化は領域での学際や学融合を進め，その一方で認識科学と設計科学とを接近させつつある。遺伝情報の知見が先制医療を生み出し，ナノスケールの解像度をもって高性能のバルク材料が創りだされているように，科学・技術のシーズの場は今や認識科学の領域に移行しつつある。現象論を基本とした設計科学を領域とする工学は，技術者教育においてますます重要であるが，革新的な研究の基盤が失われつつあるとすれば，研究と教育を推進する組織体制を如何に構築するかが最大の課題と言えよう。

人類は，科学・技術と産業・経済の活動をもって社会を発展させてきた。このプロセスを担っているのが人材と知財であり，大学と産業界との連携である。人と知財が循環する社会，これはまさに知識基盤社会であり，我が国が目指すべきところであろう。そして，ヒト，モノ，知財のモビリティが広域化している今日，国の知識基盤の構築には広域エリアでの循環が前提であることは言うまでもない。

大学改革は進めねばならないが，改革の方向や問題の本質を見間違ふことがあってはならない。社会が必要としている分野の職業人養成において，高等教育全体の枠組みに問題はないか。ミッションの再定義にあたって，強みを抽出することが真の問題解決になっているのか。学問の自由や文系の研究に考慮のない研究重点政策のもとで，大学は知のロボットの役割を果たすことができるのか。

“大学改革に何が問われているか”。この主題に対する解答は，OECDの高等教育調査団やワシントンポストの活動を再認識することにあるかも知れない。